

## 終章 本研究の成果と今後に向けて

### 第一節 本研究の成果

1830年閏3月6日、この日、少し風があったが、強くはなかったはずである。風が強い時、名主である彼は、ほかの名主と一緒に町内を回らなければならない。一旦ある所に火事が起こると、強く吹く風が助力になり、木造の家が多い江戸の町々では想像もつかない災難になる可能性が高い。收拾できない事態になる前に、最初の一つの防護壁として、名主は見回りの仕事をきちんとしなければならぬのである。

月岑の当日の記録から見ると、その日は適度な風が吹き、自然に親しむ遊びに最適な天気であったことが分かる。彼は、小網町の名主の娘二人一おしげとおりんを連れて、砂村にある元八幡宮に行った。小網町は、月岑の家から二キロくらい離れている所にある。その名主は月岑の姉婿で、「小網丁」または「普勝氏」として、頻繁に月岑の日記に登場していた。日記によると、よく月岑と一緒に遊びにいたり、お互いの家を訪れたりしていた。この日の二日前、彼らは一緒に高崎有隣という心学家の所に行ったのである。同僚というより、彼は親戚でありながら友達でもある。

月岑と二人の子供が行った元八幡宮は、隅田川の東岸にある。三人は、川を渡って向こうの岸に行かなければならない。月岑の住んでいる神田雉子町と小網町の地理的位置から判断すれば、三人はおそらく日本橋川に沿い、そして永代橋を渡って向こうの岸に行ったのであろう。もちろん、行く道はほかにもあるが、この道筋が一番近かったのである。川を渡ること自体が楽しく、この日の遊びの一部にもなる。

隅田川を渡ってからは深川に入る。この日の最終目的地は元八幡宮と呼ばれている。「元」が付いている理由は、この所は、よく知られている深川にある富岡八幡宮の元の場所にあるからである。元八幡宮に着く前に、富岡八幡宮の付近を通る。富岡八幡宮は、「名所図会」の第七巻の一番目の名所である。当社の歴史と沿革については詳しく紹介されており、この名所項目は文字の記述が四頁くらいの分量がある。さらに、境内の全景は、六頁にわたる俯瞰図で細かく表現されている。

江戸市中から来て砂浜にある元八幡宮に着いてから、月岑らはここで櫻の枝を取ったのである。

月岑はいつも日記に物事を簡略に記しており、自分の考え方や気持ちなどのことは殆ど彼の記録する範囲に入らなかった。彼が元八幡宮に行った時

の気持ちやら、一枚目の桜の花弁を摘んだ時の感覚やら、すべては日記で読み取れないものである。しかし幸いにも彼は祖父と父と一緒に編纂していた「名所図会」を出版した。この著作のお蔭で、読者である私たちは、月岑が日記の中に残した空白を部分的に補うことができる。月岑が一本目の桜を摘んだ時の気持は依然として知ることができないが、少なくとも「名所図会」の挿絵で当時の元八幡宮の景色が見える。そして自分の想像力を加えると、月岑らの遊楽の様子はもっと具体的に見えてくるようになるのである。

本研究は、斎藤家が親子三代の力を合わせて作り上げた「名所図会」を検討することであった。その検討の目的は、序論の第一節に書いたように、次の通りであった。

- ① 斎藤月岑の日記を通して、町名主の生活実態を観察する。
- ② 出版物としての「名所図会」の最終作者の文化背景、編纂意図と出版過程を明らかにする。
- ③ 「名所図会」に見る名所と遊楽を分析し、江戸の人々の遊楽様式の特徴を把握する。
- ④ 実際の地理的な江戸と、「名所図会」の中に捉えられた江戸を把握し、斎藤家の江戸観を解明する。

上記①については第一章で検討した。その結果、次のようなことがあきらかとなった。

月岑の日記（1830—1853年分）は、内容が大きく三種類に分かれると考えられる。名主の勤務、家族と年中行事、文化活動（著作の出版、文化人との往来）である。彼は多忙な仕事をしているが、その合間に頻繁に名所廻りをしてきた。後の著作のために、足を運んでいたと考えられる。

毎年の新年挨拶の記録から、月岑の人間関係を重視することが分かる。多い名所廻りの記録の中、寺社参りは一番頻繁に行われている。それに月岑が制作側として、神田祭を楽しんでいた。多彩な生活を送ることができるのは、旺盛な行動力をもっていたからであると考えられる。江戸の人の遊楽の特色について、まずは多様性である。幕府側の意図的な名所作りと当時の人々のライフスタイルとは、遊楽の豊富性を促進した。さらに、江戸の遊楽には季節性がある。例えば、春は花見、夏は花火、秋は菊見など、各季節に合うイベントをするのである。

上記②については第二章で検討した。その結果は次のような内容である。

師承関係から見て、齋藤月岑の文化背景の二つの特色があることが分かった。一つは、月岑は学統上江戸派に近づく傾向が見えることである。公的な役職を務めているが、江戸派の〈遊民的〉・市井的な文人気質を持っている。もう一つは、彼は学問には和漢兼修である。彼は特例ではないので、当時の知識人社会中でこのような傾向を持つのは普遍のことだと考えられる。

『江戸名所図会』はある意図に基づいて編纂されていることは、従来の研究に指摘されてきた。しかし、この編纂意図は著者である齋藤家三代の間で一貫しているわけではない。齋藤幸雄の発想によって『江戸名所図会』の編纂が始まったが、最後に月岑が出版したのは祖父が企画したのとは違うと考えられる。だが、図会の最も基本的な働きには、齋藤家三代は臥遊に供するという考え方を共有していた。さらに月岑の日記によって、『江戸名所図会』の出版は版元・須原屋の販売策略で行われていたことが推定される。また名所図会を通して社会地位に格差がある月岑と大名である松平定常とは交流があったことが分かった。

上記③については第三章で検討した。その結果は次のような内容である。

齋藤家が『江戸名所図会』の中に収録した名所は、実際は立項された 1043 件より多い。これは名所の項目は文字の描写だけで、挿絵だけある名所は項目が立てられていないからである。挿絵だけある名所には、市街類の名所が目ざされていると考えられる。以前の江戸名所案内記では、全くなかったからである。これは齋藤家の人々が市街景観（特に商店）を名所として強調したことを反映している。このことは、市街景観を見ることが当時の人々に江戸の名所廻りの一部に入れられている可能性がある、と考えられるのである。

さらに、宗教関係の名所が半数以上占めている。これは当時江戸に住んでいる人々の遊樂生活が寺社などの宗教地と強く結ばれていることを反映している。次は、自然地である名所が多い。江戸の人々は、自然を楽しむことで生活にもたらされた不安と焦燥感を解消する。その上、新吉原遊女町も『江戸名所図会』の中に現れている。これは、江戸の遊樂の中に著者の齋藤家が詳しく説明しようとはしていない部分を代表する。

上記④については第 4 章で検討した。その内容は次のとおりである。

江戸は城壁が無かったので、徐徐外へ開発していくことで、都市の範囲が不明確になっていた。このことは管理者側の幕府に対しては不便なので、幕府は空間再編を着手した。だが、江戸の人々にとって、どこまでが江戸なのか漠然

なイメージしか持っていなかった。幕府が江戸の境界線を決めても、江戸の人々は実感がしなかったと考えられるのである。従って、江戸の範囲について人によって解釈が違うことは十分に考えられる。

## 第二節 今後に向けて

『江戸名所図会』は江戸の範囲について斎藤家が提供した一つの答えだといえる。『江戸名所図会』が捉えられた江戸は、当時の江戸の人にとっても広大な地域に及んでいた。一方では地廻り経済の必要性に基づいて、江戸と武蔵国との一体化が不可欠である。これだけが『江戸名所図会』で江戸の範囲が広げられた原因ではないかもしれないが、拡大されて把握する江戸は、少なくとも斎藤家も含めて当時の江戸に住んでいる人々が外に対する関心に基づいた地域枠を越える表現だと言えよう。

歴史上の文人や文化人は、常に漠然としたイメージを与えている。文章を書くことだけで毎日を送っているようなイメージである。彼らの生活には、学問に関するものしか見られないと思われるがちである。そのため、心に浮ぶイメージは、いつも自分の部屋に籠って勉強するために、肌が青白く体力も弱くなっていそうな人。または、堅苦しい学問に専念しており、頭も硬くなって融通がきかない人のような想像することが多いだろう。私の想像の中でも、文人が自分の家族と楽しく暮したり、繁雑な仕事に回されたり、好きな名所に遊びに行ったりする姿は、殆ど存在しない。

しかし、斎藤月岑の日記を通し、その「文化人」という漠然としたイメージが具体的になってきた。町名主の仕事に忙しい毎日を送っていたが、どのくらい忙しくなっても自分の好きなことには必ず時間を作っていた。国学は趣味であるが、〈道学的〉な国学ではない。遊ぶように学問を楽しむ江戸派の国学者に偏っていた。このような文化背景を持っているからこそ、大変だと思われる四十年という長い歳月をかけて、「名所図会」を完成できたのであろう。

この著作の中に、斎藤家三代が名所を一〇四三件収録した。最も注目されるのは、宗教関係の名所が半数以上占めていることである。これは当時江戸に住んでいる人々の遊樂生活が寺社などの宗教地と強く結ばれていることを反映している。寺社参りは多数の江戸の人にとって宗教への信仰より娯楽的な色彩の方が強いと言えよう。仏閣神社は名所として江戸の住民に対しては多機能の存在である。特に境内が広い寺社は、大体景色が美しく、中に売店があり、年末の時になると、市場として広く利用されている。

宗教関係の名所以外に、細かく描かれた江戸市中の景観も注目に値する。図

絵で表現された町人地にある名所は、大都会である江戸の活気を忠実に伝えて  
いる。意図的に編纂する方法で、町人社会に属する江戸の都市像を演出するの  
は、「名所図会」が斎藤家三代を経て最後に達成したい目標である。だが、こ  
の目標はおそらく初代の企画者の初心ではなく、むしろ時間に従い、著者であ  
る斎藤家の三人の間に変化が起こったと考えられる。

「名所図会」に捉えられた江戸は、範囲が遥かに広い。都市の境界線が不明  
確なために、江戸はどこまでなのかというのは人によって違うが、斎藤家のよ  
うに江戸を昔の武蔵国よりやや広い地域にしたのはほかに無い。これは必ず江  
戸っ子である斎藤家の人々が観念した江戸とは言えないが、江戸の人が江戸の  
外にある世界に対する関心を反映したに違いない。

「名所図会」の中に文字や絵図などの形式で記された内容は、当時の江戸と  
その近郊を再現することに重要な史料である。だが、「名所図会」に記されて  
いない内容は、比較的注意を引いていないが、間違いがないように江戸の生活  
を認識する鍵となるのではないだろうか。「名所図会」に表わされなかった部  
分は、具体的にどのようなことであろうか、意識的に知られないようにされた  
かどうかについて、今後の課題にしたいと思う。